

「戦争を友にした小学生の頃」

杉浦初江

私は昭和の^{ひとけた}一桁生まれで、6人兄弟の長女として生まれました。戦時中は小学生でした。その頃^{ころ}の学校は国民学校と言ったのです。

生活は大変に貧しいものでした。今の暮らしからは考えられないものでした。特に^{しょくりょうなん}食糧難はどこの家でも子どもが多く大変でした。

また、食べ物だけではなく、着る物、^{はきもの}履物等すべて、物がなかったのです。配給制でしたが、^{しょくりょう}食糧等は全く足りませんでした。農家等から高いお金^{はら}を払って買ってきたのです。また母親の着物等を取りかえてきたこともありました。^{しょくりょう}食糧不足の事は、私も忘れません。卵は分け合って食べ、納豆も^{つぶ}粒分けして食べたこともありました。食べ物で兄弟げんかもしました。砂糖もなく、代用品のズルチンやサッカリンで^{かんみ}甘味料理に使っていました。また、主食の代わりに、かぼちゃ、さつまいも、とうもろこし等で食べたこともあったのです。白いご飯が食べたいと弟妹たちは言うのです。

学校に行くのは^{はだし}裸足でした。学校に足洗い場があり、そこで洗って教室に入るのです。

その頃勉強は2～3時間しか出来ず、あとは奉仕活動でした。田んぼにタニシ取りに行ったり、イナゴを取って学校の大釜で茹でてそれを売ったのです。校庭の角に、あぜ道に大豆を育てたり、勉強が出来ませんでした。

家に帰れば子守をしたり、家の手伝いをしたり、良く働きました。勉強する時は夜だけです。それも電気の傘に風呂敷を掛け、周りを暗くして下だけを明るくして本を読みました。今はうらやましいですね。

戦争もだんだん激しさを増してきました。

昭和20年7月12日宇都宮が空襲されたのです。私達家族は防空頭巾を被り、庭の防空壕に入りました。その時、宇都宮の方面が赤く染まって見えたのです。弟妹たちは恐ろしくて母にしがみついていた。その時、母はよほど慌てていたのか下の弟を反対向きにおんぶしていたのです。今となっては笑い話ですが、その時は母も必死だったのでしょう。子ども6人を守るために…。

そして17日には、とうとう栃木市に空襲になり小型爆弾が投下されたのです。

今思い出しますと、あの時は牛と一緒に田んぼに出て奉仕作業を

していました。私たちは先生の誘導^{ゆうどう}で急いで近くの川に牛と共に隠^{かく}れました。震^{ふる}えている小学生、泣き出す女の子、先生は一生懸命^{けんめい}小さな私たちを元気づけて守ってくれました。今も忘れません。その時に泉町の常通寺や栃木市の中心地万町交番近くも被害^{ひがい}に遭^あったのです。

戦時中の小学生であった私たちは、それでも元気に生きております。現在の小学生、母親は、保育園や幼稚園^{ようちえん}等があり、食べ物、着る物、欲しいものは何でも手に入りますね。学校の先生に叱^{しか}られても殴^{なぐ}られても先生様様でした。今のようにイジメ等は毎日のようにありました。それでもグチも言わず頑張^{がんば}ってきた小学生でした。もっともっと勉強したかった。自分の子どもは自分で育てるものと思^{おも}って大切に育てました。自分の人生は自分で造るものと私は思います。

